

序

生鮮食料の卸市場に行くと、威勢のいい競りのかけ声にある種の興奮を覚え、日常生活では味わえぬ活気を感じたりする。しかし飛び交う言葉の意味を理解しようとした時、それが聞き慣れた言語でないことに気づく。専門の人達相互にしか通じない符丁が使われているのである。異国の歌か、分からぬ読経にも似た生理的快さだけが伝わるのである。本来から言えば言語の一つの機能は意思を他に伝える事にあるが、当事者でない場合には使われる言語が何であろうと、自由にその環境を享受すればよいのである。つまり競りのプロセスはここでは必ずしも理解する必要はない。ところで当事者だけに伝え得る符丁は、はじめは簡便化のために訛ったり、洒落た表現から発生したのかも知れないが、何時か符丁を駆使することが特定社会の一員であることの証しとなったのではあるまいか。つまり符丁が分からなければその社会に参入できないのである。こうした事を利用して花柳界などに通じているふりをする人をよく見かける。

一般にどのような社会でも仲間内にだけ通用する言葉に隠語と言われるものがある。余所者には知らせたくない時に身内にだけ自分の意思を伝えることができ大変便利である。隠語は単に他に分からせないようにするための表現上の理由だけでなく、その社会に限って意味をもっているものも多い。もし他には絶対に分かっては困るということであれば暗号を使うことになる。このように恣意的ではないが、他からは分かり難いのが方言である。しかしこれも当事者からすれば意思疎通に最も適した言語ということであろう。

こうして、それぞれ社会は、共通の関心事に適した言語と表現をもって文化を形成している。学問の世界もそうした意味では一般には分かり難い言語と表現をもった社会と言ってよい。いわゆる専門用語、学術用語といった類の言語が常用されるわけで、門外漢からは理解できない事が多い。つまり方言か隠語の社会と変わらないのである。しかし今後、研究がより学際化、国際化の方向にあるとするならば学問もより開かれた言語で語れることが必要である。難解な術語でしか語れない研究は、自らの分野を益益閉ざして行くことになる。他から分からないことで存在を主張するような研究は符丁を使って粹がる人と同じく今日的ではない。研究は競り市場のように活気を呈しているだけでは困るのである。

1989年4月

清水建設株式会社 技術研究所長

工学博士 太田利彦